
妖怪と戯れる人間

三田楊枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪と戯れる人間

【NZコード】

N8680D

【作者名】

三田楊枝

【あらすじ】

普通を自称する人間、大木正司は学校の帰り道に女の子になつて気絶した猫と遭遇した。その猫を家へ連れて帰る選択を取り、正司の人生は大きく変わる事になる。

その一、妄想との邂逅（前書き）

――作田となりました。
「」指摘などあれば嬉しい限りです。

その一、空想との邂逅

みなさんは化け猫とやらを知つて いるだろつか？

十数年生きて神通力を得た猫、自分に酷い事をした人間に復讐するため に化ける猫。そして恩人となる者の恨みを晴らすために化ける猫……とまあ、文字通り人にとつて都合の良い能力を持つた空想上のキャラクターの事だ。

そして、空想上にしか存在を許されない妖怪といつ生命体の一種でもある。

妖怪といつモノはこの世に存在しない生命体で、今の僕等よりも想像力が豊かだった大昔の人達が紙に墨に漬けた筆で作り出したおとぎ話のキャラクターだ。

だから、本当ならこの世にいはならない存在。

……茫然自失としてる僕の足元にいはならないのも当然のはずである。

目をこすつてもう一度足元を確認する、ソレはやつぱり幸せそう るように眠つていた。

頬をつねつてもう一度足元を確認する、ソレはやつぱり幸せそ うな寝顔で眠つていた。

僕の足元にいるのは一匹の猫、だつたもの？

最初に現れたのは確かに明るめの黄土色でふさふさな毛をした猫 だつたけど、ソレは突然その愛らしい口を開いて「見つけた」と見 事な人語を操つて体を震わせて明るめの黄土色した煙を噴出してう ごめいて。

それで、女の子になつた。妖怪変化といつのは服も用意できるら しく、裸でなかつたので僕の思考回路がショートせずに済んだ。

しかし、女の子が裸で現れて僕の脳がパンクして気絶してしまえ ばどれだけ楽だつた事だろうか。ソレは女の子になるや僕に微笑んで、そこで体力が尽きたのか倒れてしまつて今の現状に至つて いる

のだから。

化け猫に関する話を唐突に切り出したのは現実逃避に他ならない。何せ今の僕は脳こそ正常に働いているとはいえ、熱暴走しているのだからまともな思考もできるはずがない。

まあ、かといって今眠っている女の子？ が猫から化けたとはいえたけ猫という妖怪に断定するのは早計だろう。きっとどこかで僕に恨みを持った人が腹いせにトリックを使って僕を驚かせるために仕組んだ罠だ。

これは一種の自慢だが、僕、大木正司おおき せいじは良くも悪くもあくまで普通の人間だ。成績も中ランクで女の子とはモテてるともモテてないともいえない程度の交流をし、性格の方だつてどちらかといえばお人好しなだけで特徴も無い。本当にあくまで普通の人間なのだ。

そんな僕が誰かの恨みを買つたというのなら僕はその事実を肯定するだろう、敵を一人も作らないクラスの人気者じゃないんだから僕を快く思つてない人は少なくとも知つている人の中で上げればざつと三十人はいる。その中で恨まれるような事をしたのかもしれない。

だからこれは夢なんだ、さつき類を文字通り千切れるほどの強さで引っ張つた時に痛みは感じたけど、夢の中なら何があつてもおかしくないんだから痛覚があつたつておかしくない。

それと最近は友達の生徒会選挙に裏方で協力してたから慣れない仕事に疲れやストレスを感じてありもしない幻覚を見てる可能性だつて否定できない。さつき化け猫がどういう妖怪かを考える現実逃避をしたが、化け猫の事なんて今日の帰りに寄つた図書館で妖怪図鑑という本をたまたま読んだから知つたんだ。だから「女の子に化ける猫もいるのかな？」とか頭の中でこつそり考えたりしたから目の前の幻覚が見えるつていう事もありえる。

それなら僕がこのまま立ち止まつていては不審がられるだろう、すぐ立ち去つてしまおう。

「おーい、そこの黄昏てる凡人！」

幻覚を見捨てて歩き出そうとするとき、背後から実に不愉快な声で呼び止められる。

振り向くと、僕に走り寄る野郎が一人。

「君は誰ですか？ 僕には他人を凡人と呼ぶ凡人の知り合いなんていません、いふとしたら高校二年生にもなつて一次関数もできない無能ぐらいです」

「それはまさしく俺の事だろうな、誰が凡人だ！」

「お前だよ、つていうか少し黙れ無能」

「無能言うな凡人つて言え！」

「引き籠もつてろ天才」

「そこであえて天才と呼ぶか、やはり俺のライバルは強敵だ」
無視して先へ進もうかと思つたが、それはそれでこいつの対処が面倒なので付き合つておこう。

で、騒々しさにクラスの不評が集中してゐるこいつは新山風太。にいやま ふうた 不本意な事に僕の悪友をやつてはいる。もしも突然腹痛が起きたりしたらこの無能がエセ黒魔術をやつて失敗した影響で巻き込まれたせいだと思つていい、そのくらい馬鹿をやりまくつてはいる馬鹿だ。

しかし、丁度良い奴が来てくれた。

「丁度良い、今からお前の視力検査をしてやる。俺の足元に何があるかを言い当ててみる」

「それは宣戦布告か！ いいだろう受けて立つぜ！」

こんな唐突で突拍子も無い事を平氣でやつてのける、風太という人間はそういう奴だ。

それと無能の癖に風太の言つセリフには妙な説得力があつて、嘘を吐けないようなタイプ。こいつの言葉なら足元の女の子が本当に存在してゐる事が納得できる。

もつとも、それは夢じやない時の話だけれど。

「おいおい、お前は俺をなめてるのか？ 何もないじゃないか！」

何もないという事はこの女の子は僕が脳内で作った幻覚らしい。明日あたりにでも病院に行つた方がいいかな？

「何もないか、なるほど……」

「ああ、俺の華麗な視力にはすんげーめんこい女の子と、ヨキブリの足以外は映つてないぜ！」

「十分何かあるじゃねえか無能！」

無駄なボケをされたのでツツコミを入れながら鞄に入れてあるツツコミ用の木材で頭を振りぬいた。そういえば事ある毎に僕をツツコミ役にしようとボケを繰り返す癖があるんだつた、やっぱり無視して帰つておけばよかつたな。

しかし、幻覚でないと解つてもやつぱり問題が残る。

「この女の子に見覚えあるか？」

「お前がこつそり飼つてる子なんて見覚えある訳ないだろ」

まだいらんボケを抜かすので木材で喉仏を突いて黙らせた。

困つたな、これが夢だとしても女の子を見捨てていくのは今更ながら躊躇われる。特に風太が隣にいる今では余計に見捨てる選択が許されなくなる。人前では見栄を張りたくなる性分はこんな時に厄介だ。

風太に任せて逃げる事もできるが……この無能に無防備な女の子を差し出したらどんな人体実験に使われるか解つたもんじやない。

「お前は力ある方だよな、この子を担いで警察まで送ろう」

「な、何を言つてるんだお前！」

僕が提案すると風太が本気で驚く、この提案は至つて普通のはずだけど？

「お前は目の前に女の子が倒れているというのに、そのチャンスをみすみす逃すつもりか！」

「意味不明だから今度は目に木材叩きつけていいか？」

「アホ、お前には下心という男に必要不可欠な物が抜けている、つまりお前はオカマだ！ そのオカマから脱却するために女の子はお前の家で介抱して恩を売るんだ！」

下心通り越して犯罪になりかねないという事はこの無能の常識には無いらしい。

で、僕は何度も警察へ届けようとしたが風太が本気モードになつてやたらと何か偉そうな御託を並べられて、結局猫が化けた女の子を僕の家まで連れて行く事になつてしまつた。

（何でこんな事になつたんだ……）

早い所見捨てていけばよかつたと、心底後悔しながら家への帰路を辿る。

そして、女の子を家へ連れて行つた時に、僕は今起きた事がどうでもよくなるくらいに前途多難で不可解な出来事に巻き込まれる。その時の僕は頭を抱えてこう言った。
僕に何の恨みがある、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8680d/>

妖怪と戯れる人間

2010年12月16日21時47分発行